

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●8月は多忙だった。妻の七回忌を済ませた。月末には2011年からスタートした東日本家族応援プロジェクト行脚、一区切りの顔合わせに、青森(むつ市)、岩手(宮古市)、宮城(多賀城市)、福島(福島市、白河市)に五泊六日で出かけた。各地で長いお付き合いになった方々と懇談したが、今になって初めて聞かせて貰った話もあって、対人援助の必然、息の長さのことを思った。

続いているモノが一段落すると、新たなモノが始まる経験をこれまで繰り返してきたが、私はもう新しい何かが始まることもなかろうと思う年齢だ。「断捨離」なんて無理矢理な煽りにそそのかされず、続くモノは死ぬまでと思って、終わっていくモノも静かに見送っている。

●有り難いことだがマガジンに関しては不測の事態が本当に少ない。今号で66冊目である。

原稿が集まらないとか、発行の遅延とか、合併号にするとか、費用がかかりすぎるとか、編集作業分担者がいないとか、原稿内容のトラブル等、諸々のありそうな事情が17年間、ほぼ発生していない。

あって当然の都市インフラのように存在できているのは誇りだ。そこには継続可能システムの構築が重要だとの認識がある。その自覚的対応がトラブル発生を防いでいるのだが、こういうところは世の中の諸般の事情にも大いにある。

そうではあるのだが悩ましいのは、社会に大きな変化をもたらすのは、準備不足の失敗がきっかけであることが少なくないことだ。周到的準備や恒常性の維持機能は「変革」には馴染まない。

安定性とマンネリを安易に結びつけない知恵は、継続を確保するのが簡単ではない「平和」維持と重なってみえる。

編集員(チバ アキオ)

実家のある秋田には 50 年以上行き来している。秋田に着くと、自然と便利な車社会に入り込んでいくことになる。

これぐらい通っていると、いったことがないところはないぐらい、県内をうろうろしてきた。麻辣担も、もっちゅりんも秋田で食べた。ネットニュースも、SNS も秋田のニュースが関西と同じぐらい入っている。そこは、こう行けば着くところという実感は過去の車の移動経験が基になる。

これを書いている現在は、秋田駅を出発した普通電車内である。この列車の行き先は奥羽本線院内駅。さっき出発するときに秋田駅には、青森から秋田まで乗った「特急つがる」や、横には新潟に向かう「特急いなほ」。青森方面の普通は追分駅行き。羽越本線は新屋駅行き。男鹿方面は男鹿駅行き…と行ったことがない駅名ばかりが電車の行先として表示されている。院内駅は、車では行ったなあとか、思い出す。

こうしてみると知っている秋田とは違うように見える。秋田駅にバスで行くにも、ICOCA でピッといけるし、グーグルマップで調べればルートはすぐわかる時代。青森でも、広島でも、大阪の高槻市など出先でバスにも乗れるのも昔に比べると簡単で、便利極まりない。

何を基準に見るのか、どの部分を見るのかによって同じものを見ても見えところ、見え方が異なり、その結果伝わってくるものが異なる。これは編集と同じ。秋田の普通電車にはインバウンドのお客もいるし、飛行機から連絡で乗車している人もいる。普通電車の乗降口は開閉ボタンを用いるのは夏も同じ。まだ乗っていない秋田内陸縦貫鉄道を含めると、まだまだ知ることができそうな余地があり、次回の秋田入りも楽しみでしかたがない。

編集員(オオタニ タカシ)

編集会議でも何度か話題にあがったのが「急に具合が悪くなる」という映画で、「健康な者たちは本当に生きているのか」という作中の言葉が話題に登場しました。

編集者も執筆者も、それぞれの人生の途上にいま

す。当然、病気やケガ、思いがけないアクシデントなど、望む、望まないに関わらず色々な事態が起こって行くことになります。そして、そこで対応というか、何かしらの選択を迫られていく。ある意味で人生とはそういうことの連続なのかもしれません。

この映画の原作は、哲学者である宮野真生子氏と、人類学者である磯野真穂氏の往復書簡から構成された書籍なのですが、その中に“選択したことで、その先で自分が形作られていく”という趣旨の言葉が記されています。人生におけるたくさんの選択が、その人自身やその人の人生を形作っていく。

そう考えると、15年以上、66回に渡って「書く」という選択を継続した執筆者の方々にも、その選択の結果として形作られたその人のあり方が示されているように思います。そんな執筆者の奥行も含めて、ぜひ多彩な執筆陣の連載をお楽しみいただければと思います！

対人援助学マガジン

通巻66号

第17巻 第2号

2026年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第66号は2026年09月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2026年08月25日**！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ書ける分野の記録を発信したいとい

う方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心おきなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方は、**対人援助学会への入会手続き**を以下でお願いします。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

この絵は木陰の物語 No.312『にぎやかな共同墓地』の一コマなのだが、ワンカットの絵力としては弱い。にもかかわらずこれにしたのは、この場面の話に心動かされたからだ。

これは3.11津波災害の大きかった沿岸部の街のタクシー運転手からの聞き取りだそうだ。

運転手仲間は皆、当たり前体験として、行き先に流された街を告げる乗客に遭遇している。だが目的地に着いてもお客の姿はない。

「みんな自分の街に戻りたいんだねえ・・・」という感想が胸を打つ。思いが残るというのは怪談話ではない。

2026/9/15 団士郎